

【書評】山口誠一訳著『ニーチェ「古代レトリック講義」訳解』知泉書館 二〇一一年
「言語はレトリックである」という主張をめぐって

中村, 公博 / Nakamura, Kimihiro

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

61

(終了ページ / End Page)

64

(発行年 / Year)

2012-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008220>

【書評】

山口誠一 訳著 『ニーチェ「古代レトリック講義」訳解』 知泉書館 二〇一一年

「言語はレトリックである」という主張をめぐる

中 村 公 博

本書は、ニーチェが『悲劇の誕生』を上梓した直後の一八七四年に、わずか二人の聴講生を相手に自宅にて行ったとされる講義の記録の本邦初訳である。本書について大方の人の関心はさしあたり一致すると思われる。それは、大学での古典文献学の講義であるにもかかわらず、ニーチェはなぜ「言語はレトリックである」というきわめて大胆な主張をなしたのであろうか、ということであろう。ただし、この講義録を読む者は、その主張が弱冠二四歳にしてバーゼル大学の古典文献学教授として招聘されるほどの圧倒的な西洋古典学的教養に裏打ちされたものであることに気づかされるであろう。したがって、本来ならば、彼の講義について何か分析する者は、その教養を共有する者でなければならぬはずである。残念ながら私はそのような者

ではなく、一介の古代哲学研究者にすぎないが、わずかながらこの訳解の最終工程に関わる中で、ニーチェが西洋古典の文章を自由自在に引用し、操っていることを実感した者として、この訳解の持つ意義を明らかにしたい。

“Die Sprache ist Rhetorik.” という命題が二度にわたって宣言される第三章（特に一七頁）にまずは注目しよう。

「レトリックは同時に言語の本質である。言語は、レトリックと同じくらい真なるものに関係しないし、事物の本質に関係しない。言語は何かを教えようとしなない。むしろ、主観的な刺激とその受容を別のものに転移させようとする。」（二一六行）「言語はレトリックである。というのは、言語は、臆見だけを転移させようとするのであって、認識を転移させようとはしないからである。」（二二二―二五行）

この二つの文は両者とも、言語は事物の本質認識を伝えるのではなく、感覚刺激由来の臆見を「転移する」ものであるという言語観を語る。ところがこの二つの文の間とその後には、ニーチェがこの講義録で多く依拠するゲルバー『芸術としての言語』(一八七一年)^①からの抜粋(の寄せ集め)が存在し、これが右記の言語観の典拠になっていることは明らかである。たとえば、serpens(蛇)がもともと「匍うもの」だという例から「一面的な知覚が直観全体、完全な直観のかわりにはいりこんでくる」(一八頁。ニーチェによる抜粋)というように。とはいえ、そのゲルバーは「すべての言葉は、もともと、はじめからその意味からすると転義的比喩なのである」(一七頁。これもニーチェによる抜粋)とは言っても、「言語がレトリックだ」とまでは断言していない。断言したのはあくまでニーチェである。それが分かる抜粋に注目しよう。

「事物が自覚化されるのではない。わたしたちが事物に対面する様式、本当らしく説得力のあること(pihanon)が自覚される。事物の十全な本質はつかまれることはない。……刺激を知覚するとすぐに音声表現が進行する。感覚は事物のかわりに徴表だけを受容する」(一七頁)

私が傍線を引いた箇所は、原文ではギリシア語で pihanon と「一語であり、ゲルバーのもととの文章」^②

にはない。このギリシア語を挿入したのは他ならぬニーチェである。そしてこの言葉こそ、アリストテレス『弁論術』第一巻二章冒頭の弁論術定義「レトリックとは、個々のことについて可能な限りの本当らしく説得力ある手段すべてを観察する能力である」(七頁)の中核をなす。

ニーチェは当講義でこの定義の「本当らしく説得力ある手段」(to pihanon、岩波文庫の戸塚訳では「説得の方法」)を重要視し、この定義を紹介する箇所では三度にわたってギリシア語のまま引用し(八頁)、「各事物にあって作用し印象のあるものを見つけ出し妥当させる能力……をアリストテレスは、レトリックと呼んでいる」という独自の解釈も施している(一七頁)。つまり、ニーチェは pihanon を通してアリストテレスの弁論術をゲルバーの言語論に(半ば強引に)接続したことにより、言語が、事物の本質「認識」ではなく、説得力ある「臆見」を転移させるレトリックだという言語観への途を開いたと言える。

このような「反本質的」とも言うべき言語観はニーチェ研究者にとっては常識であろうが、その成立過程において「転移」の概念が重要な役割を果たしていることは、本訳解の「解説 レトリックと哲学」が指摘する重要なポイントである。ニーチェが「一八七〇年のおわりにはすでに転移を包括的な意味で使っていた」(九九頁)とすると、一

八七一年に第一版が出版された『芸術としての言語』における、「転移」を単なる「転義（的比喩）」のみならず言葉が聴覚から音声形象として生起する神経生理学的プロセスと重ね合わせて捉えるゲルバーの見解にニーチェは強く共感したはずであり、それは、当講義に先立って一八七三年夏に書いた『道徳外の意味における真理と虚偽について』における「転移」の使われ方にもそのまま活かされていることから証拠付けられる。そして一八七四年の当講義にいたると、右記の抜粹に示されたように、ゲルバー的言語観に新たに *pithanon* というレトリック的要素を導入し、弁論術という学問体系と接続したことは、本訳解が伝えるニーチェの独創である。この独創こそ、単なる単語レベルの「転義（的比喩）」のみならず、神経生理学に根拠を持つ「転移」そして文章レベルでの言語＝レトリック観を確立させたのである。その過程についての細かな分析は、本訳解の白眉であろう。

この過程において、ニーチェによるアリストテレス『弁論術』研究がいわば触媒たりえたのは、当の『弁論術』にそれを可能にする側面があったからだと思ふ。右記の定義によれば、弁論術は他の技術と異なり、何を対象としても、*pithanon* を見つけ出す能力であり、その限りで技術・知識になりうるものであったが、極論すれば

pithanon やえ見つけ出せれば「語ることすら必須ではない」（八頁）とまでニーチェは解釈している。アリストテレスの考える弁論術は対象そのものについての知識でもなければ、語ることそのものでもなく、あくまで言論についての知識だからである。さもなければ弁論術を「単に言論の知識のみならず、対象となる何らかの事柄の知識へと作り変えるため、そう変わることで知らないうちに（弁論術）本来のあり方を破壊することになる。」（アリストテレス『弁論術』1350b14-16）

学界での孤独を深める一方であったニーチェであっても、文献学者である以上、大学での講義は保守的なスタンスを取るのが通常であり、「言語はレトリックである」といった大胆な主張は控えてしかるべきである。しかし、この講義において彼は、当時最先端の研究成果を利用しつつ、そのような大胆な主張を提示することで、当時すでに学問体系として解体し過去の遺物となりつつあった弁論術の復興を目指したとみることができるだろう。しかし、それならば、アリストテレスの弁論術が実質的には政治・倫理学の一分野であり、説得論証を中核としていたことも忘れてはならない。もしニーチェがレトリック復興を目指すのならば、それは説得論証の復興でなければならなかったはずである。しかし、『フィロソフィカ』の中に収められている

『弁論術』一巻および三巻の独訳が示すようにアリストテレス弁論術を徹底して研究したはずのニーチェはそうしなかった。本講義の九章までの彼の関心は、もっぱら、いわゆる修辭、とりわけ文体論あるいは隱喩論を扱うことに向けられ、他の要素については特に独創的な見解を示してはいない。それはなぜなのか。

これについて、本訳解の「解説」は、総合文に代表されるようなニーチェの文体技法、仮象論といった哲學史的脈絡の中で明らかにしようとするものであり、その適否の検討は今後のニーチェ研究、哲學史研究に委ねられるが、その一方で、純粹なレトリックの歴史の中にこの講義録を位置づけて考察することも必要であろう。それは他ならぬ山口氏が「将来、レトリック受容史研究の面から全訳することが望ましい」(凡例²)。九四頁にも同様の記述あり)と希望していることである。この希望は日本の西洋古典學において早くも実現されていることを最後に紹介したい。古代弁論術を専門とされる堀尾耕一氏により当講義の全訳⁽³⁾がなされている。そこには、山口氏が強調するような「ディオニュソスの科學的弁論家」ではない、徹頭徹尾古典文學者としてのニーチェが現れている(かの「転移」も「移しかえる」と訳されている)。ところが、その「解説」において堀尾氏はこう述べる。「やや穿った見方をするなら、

彼はこの著作において『体系』としてのレトリックを確信犯的に抹殺しようとした……すでに瀕死の『体系』のうち、ただ文体の部分だけが同時代に訴えるものとして――あるいは自らの生とのつながりを持ちうるものとして――哲學者ニーチェの目に映った」(三五三頁)と。その一方で現在の我々が知るレトリックのその後の運命を踏まえて、弁論術の「伝統的な章立てを度外視し、『文体』論を軸に据えたその記述の進め方は、むしろ時代の趨勢を的確に先取りした」(同上)とみると、古典文學者としてのニーチェの力量は、『悲劇の誕生』に対するヴィラモヴィッツのあの激しい批判とは全く異なった仕方、改めて検討・評価されねばならないと思われる。山口氏によるこのいわば哲學的訳解は、堀尾氏の西洋古典學的翻訳とともに、そのための試金石となると思う。

《注》

- (1) Gustav Gerber, *Die Sprache als Kunst*, Bd. 1, Bromberg, 1871. オンラインで読むことが可能。
<http://archive.org/details/diesprachealsku02gerbgoog>
- (2) Gerber, a. a. O., S. 169.
- (3) フリードリヒ・ニーチェ『古代レトリック講義』*Studia Classica* 2, 2011, pp. 279-353. ウェブページ (<http://hist-q1chiba-u.ac.jp/sc/>) 内でも公開予定とのことが可能。